

小説

生命の門

稲瀬 隆

「では、そこでショーツを取って、こちらの椅子に座ってください」

躊躇いを含んだ衣擦れの音がする。

ナースの原川が柔らかな口調でスカートをたくし上げよう指示しながら、両足の固定ベルトをセットした。

「先生、お願いします」

フットスイッチを踏むと椅子にも見えた内診台は回転しながら背もたれを倒し、患者の両足を押し広げながらカーテンの下をくぐらせ、露わな女性器を松埜の目の前に突き出した。

「これからまず外側のチェックをしますね。」

両手に極薄のプラスチックグラブを佩き、LED照明を

股間の性器に合わせた。

「洗浄します」微温湯が流れ、ふき取られた。

「まず外側を触診しますね」

両手が褻に触れると、患者の太ももがビクンと閉じようとするが内診台の足載せがそれを許さない。小さな恐れと恥じらいを感じ取って松埜は、脱力と深呼吸を促した。

初診の患者は気を遣う。

婦人科の電動内診台は日本独自のものだ。カーテンで患者と医師双方の視線を遮断するのもわが国ならではの「配慮」である。「下半身むき出し」で、視線を合わせる羞恥心への「配慮」なのだ。他方、欧米では下半身全体にド

レープをかけ、医師が患者に見えるように手順を説明しながら、「了承」を得つつ診療を行う。医師も対等の「見られる」立場にある。最近では日本でも隠された「向こう側」を確認したい、という声を聴くようになった。「不当な」医療や「不適切な行為」が摘発されるようになったからだろうか。松埜が父からこの医院を引き継いだ時はまだ、患者が自分で踏み台から上る旧い台だった。半身裸体の女性たちはどんな気持ちでその段を上ったのだろう。

父が心筋梗塞で倒れた頃、松埜洋輔はまだ地方の大学病院で内科医をしていた。医師を志した頃は、産婦人科医にだけはなるまいと思っていた。小学生のころ悪ガキどもから『お前もオマンコ医者、継ぐんだろ?』、『お前んちオマンコ写真の本あるんだろ、見せろよ』、『松埜クンてイヤらしいワア、一生、女の人のアソコを診るのね!』さんざんに言われた。「お前たちもみんな、そこから生まれたんだ!」そう言い返すだけの知識と気力がなかった。その度に松埜の脳裏には幼児期を過ごした母の実家の産科医院で見た、異様な光景と異臭の記憶が逆流したのだ。血液、尿、羊水、その他の体液、人体が内側から発する生々しい動物の臭気と、金属器具を入れられ開脚固定された女たちなにかの「おしおき」だったのか。幼児には分からなかった。

大学二年の初夏、生殖医療のゼミで見学実習に行った先是某市の産婦人科医院だった。そこには幼い頃、自分の頭上に見えた風景、分娩台に半裸で拘束され開かれた女の脚。『それ』が今、自分の胸元にあった。患者は中絶手術を待つて眠っていた。数名ずつが足元に呼ばれ、重複子宮についてボードで無言の説明を受けた。太腿の力が抜けて小刻みに震え、自分の顔の紅潮が分かった。当時付き合っていた女友達に漏らしたところ『アンタたち! ひつどいことするね! 女が一番つらいところを“見学”なんて!』

父は日頃、仕事についてあまり話さず、松埜自身も医学部受験をした頃でさえ父の具体的な診療に関心がなかった。ただ、しばしば夜中の往診に出かけ、疲れた面持ちで帰宅する姿は覚えていた。母の実家を継いだ叔父は診療・分娩の合間での仮眠のため、アルコール依存症となった。それもこれも「産婦人科」の宿命なのだと、入学前に刷り込まれた。研修医時代のアルバイトでは産科の当直もしたが、しんどさは変わらなかった。初めて内診を行った時、それまで彼女のものさえ正視した覚えがなく、大学二年時のゼミ体験がフラッシュバックして、目の前の露わな女性器に触れる手と脚が震えた。挿入した指がなかなか子宮口を捉えられず、自分の短い指を呪った。少しだけ年上の落ち着

いた経産婦だったことが僅かに救いだったが。

◆患者 ○○愛希（二十二歳）…子宮頸がん検診

今、内診台にいる患者は大手法化粧品会社入社一年目の社
会人。初診は一週間前だった。

会社が国の指針に沿って子宮頸がん検診を社内健診に取
り入れ、いわば職務上の義務となった。しかし彼女はとて
もそこでは受ける気になれない、といって来院したのだ。
ふだん使ってる小会議室に健診会社が機器を持ち込んで、
カーテンで仕切った検診室にしたようだ。先に受けた同僚
たちは、パイプ椅子のような簡易内診台と使いまわしが疑
われる器具（おそらく陰鏡）、アルバイトらしき医師の対
応に不快と不信感を露わにしていたという。

「わたし、まだ、性経験がないんです」

質問票チェック欄の空欄を見つめ、彼女は絞り出すよう
に言った。

「でも、子宮頸がんは怖いし、会社も、ここで受けないな
ら他院での診断結果を持ってこい、って言うし・・」

松笠は、性体験がなければ頸癌ウイルスの感染リスクは
ないし、そもそも初体験で感染しても五年以内はガン化の
おそれもほぼない、初体験が早い英米欧州でさえ子宮頸が
ん検診は二十五歳からだ、と説明して帰したが、今日、

左手で下腹部を深く押し下げ、子宮、卵巣の位置と異常を
確認する。小さいクスコでは子宮頸部を捉えるのが少し厳
しい。患者の心境が腿の緊張で分かる。松笠は殊更にゆっ
くり、低い声で
「大丈夫です。検査できますよ」

女の性的羞恥心は男の性的趣味が作り出したものだ、と
彼は思う。男にとって女の恥じらいは女体を覆う最後の薄
衣だ。隠そうとするからこそ、男はそれを剥ぎ取ることに
快感を覚える。羞恥心は文化の所産だ。腰に回した紐一本
だけで暮らす裸族の女は、それが解け落ちると激しく羞恥
するという。他方、欧州では自然回帰を謳って男女を問わ
ず全裸を楽しむ伝統さえある。マリーアントワネット他、
王妃の出産が公開されていたフランスでは、今も婦人科検
診で全裸を求める病院が少なくない。恥じらいのない裸体
は単なる人体だ。

婦人科検診には大半の女性が抵抗感を抱いている。個人
差は大きいものの男性医師、とくに初診時にはそれが強い。
その根底にあるのはやはり羞恥心や屈辱感だろう。それを
補うのは相互の信頼関係だ。そもそもこんな異常な体勢で
金属器を性器に入れられて、不快でないわけがない。最大
限の心配りが必要なのだ。女性医師にはその辺の配慮が乏

再来院した。
「庶務課は、どこで受けても良いから必ず検査して診断書
を提出しろ、っていうんです」

女性健康推進を謳う国は「二十歳になったら子宮がん検
診を」と勧めている、当社の受診率が低いのは困る。とい
うことだ。科学を解しない無能な行政と医療界利権の犠牲
者といえる。

電話をしてあげる、と提案したが、新入社員の身で、そ
れも困る、という。さりとて何も診療せず診断書は書け
ない。まずは診て、痛みが小さく試料採取できそうならば
細胞診に出す、ということにした。良識ある医師であれば、
性体験のない患者の内診や陰鏡診は極力避ける。双手によ
る診断でも、最小サイズを用いた陰鏡診でも、処女膜の形
状によっては切開が必要になる。米国で会った産科医のよ
うに、陰鏡診で初体験が容易になる、などとうそぶく気
にはなれない。

触診で外生殖器に異常がないと確認の後、膣口を両手で広
げると幸い処女膜はリング状で、クスコもSSサイズなら
いけそうだ。

「内生殖器をチェックします」まずゆっくり右手第二指を挿
入して痛みや不快の有無を確認した後、右手第三指を添え、

しい者がいる、との嘆きをしばしば患者から漏れ聞く。
『女だから当たり前でしょ』『みんな通る道なの』という
意識がどこかにあるのだろうか。

「子宮頸がんの検査に入ります。器具が入るのでゆっくり
息を吐いて力を抜いてください」

クスコを温水でちよつと温め、左手で開いた膣口にそろ
りと挿入してゆく。角度を変えつつゆっくり押し込み、そ
の奥に辛うじて見えた子宮口までサーベックスブラシを送
り込んで細胞を採取した。

「はい、終わりましたよ」

緊張がほぐれたのか、カーテンの向こうから、ああつと
小さな泣き声が漏れた。今日日、こんな反応は珍しい。
原川は、だいじょうぶですか、と優しい声掛けをしてくれ
ている。

翌週の同年代の患者は対照的だった。

◆患者、○○心愛（十八歳）…月経前症候群（PMS）、ピ
ル処方

患者は、大学1年生。月経前の不調軽減ため低用量ピルの処方希望してきた。髪は高校卒業式の午後染めたという真つ赤だ。彼女は就職相談に来た学生のように屈託なく、避妊効果についても質問し、こう言った。

「これからアソコの診察するんですか？」

『女性とみたら妊娠と思え』は、内科外来の研修時代に刷り込まれた「金言」だ。だが心得のない他科の医師が安易に内診等を行うのは以ての外だ。

「問診票でとくに問題がなければ、必要ありません」松埜は苦笑を隠しながら答えた。

かつてわが国ではピルの処方時、毎月、「健康チェック」のため内診を行っていた。血栓症等リスクへの注意と言われたが今日、低用量ではほぼ心配ないとされている。利用者の多い欧米では問診等、概ね年に一度だ。明らか過ぎるが、未だに毎処方時に行なっているクリニックもあるようだ。内科の血液一般検査、眼科の視力検査、耳鼻咽喉科の吸入等々、居酒屋もどきの「お通し診療」である。

患者の問診票をみると、性器の不快感にもチェックがあった。軽度の搔痒感らしい。尋ねると、婦人科受診ははじめてだという。型どおり体温、血圧測定を終えて、「ではそちらの方で・・・」と原川の指示も終わらぬうち

ひとつなのだろうか。ちなみにドイツ語で女性器の陰唇は「恥らしい唇」と呼ぶが、和語では「陰の唇」。性器には男女とも「陰」がつく、日陰者扱いだ。そもそもは次世代の生命を生み出す大事な器官なのだ。

現存するサルの仲間が発情サインを見せないのはホモサピエンスだけだ。ヒト科のサルは直立歩行によって女性器が隠れ、産道は曲がり、難産となった。少しでも楽に産むため出生児は未熟化し、長い養育期間が必要となり、男女を結びつける性生活が必然となった。ヒトの雌が他のサルと違って発情期を明らかにしないのはそのためだ。男はいつも発情しており、女が性器を隠すのは突発的で無意味な性行為を避け、社会を維持するための知恵が発祥なのかもしれない。

「触診します。不快感か痛みがあったら・・・」と臍口を開いて少し顔を近づけた途端、強い異臭を覚えた。痛んだ干物やクサヤの匂い。トリコモナス？患者には内診前に膀胱を空にするよう指示する。その時トイレで洗浄されると病気のヒントも消されることもあるが、これは顕著だ。

検査試料を採る、というと、

「先生、今度ここで動画撮影させてもらえませんか？私、

に、二人の目の前でデニムスカートとショーツを脱ぎ始めた。そして止める間もなく自ら衝立の裏に回り、「ここに座るんですよね。」笑顔で「AVで見た」と内診台に座り込んだ。台が動き出すと「すごい、××ハイランドの『○○じゃないか』みたい！！」

カーテンの下をくぐった両足が開き終わるやいなやカーテンの端を引っぱって、

「カーテン開いていいですか？なにするか見たいんで」欧米式に説明しながら診療するのは決して本意ではないが、こちらも「見られる」側に立つのは緊張する。

「あ、あ、もちろん、いいですよ・・・」

松埜は戸惑いながら、カーテンを開け、視線をそらすように性器を見下ろした。きれいに脱毛してある。ふと、ふつから焼けたロールパンのハムサンドが頭に浮かんだ。

彼女の性器は一見して傷もできものもなく、きれいだった。だが、と松埜は常々思う。そもそもむき出しの女性器はそれ自体、それほど美しいものではない。目や唇の方がはるかに美しい。仮にそこだけ切り取った画像にしても、思春期の少年か、女色に飢えた者でもないかぎり、特段に興奮はするまい。やはりなんらか魅力を発する女性の一部であることが男を奮い立たせるのだ。羞恥心はその演出の

個人配信してるんですよ」

「動画配信？」松埜はドキリとした。

「・・・それはハッキリお断りします」

ウェブ上で自分の裸体を、そして性器までも見せて金銭を得る生配信。人類はデータ売春を行う時代に突入した。

ヒト以外のサルは、雌が発情期サインが現れた性器を見せて雄を誘う。ヒトは直立歩行で性器が隠れ、代わりに乳房が雌性の表出となった。ヒトの雌が自ら性器を露わにするのは本来、次代を共に作り育てるパートナーと定めた相手に、である。その意味で、容易には露わにしない女性器は女の最終兵器だ。いや、そのはずだった。だが今はネット上に性画像が溢れている。それだけニーズがあるということだろう。すべての軽重が金銭で量られている。その一方で結婚、出産が着実に減ってきた。恋人同士でもなにか齟齬があれば、不同意性行為で訴えられる昨今、植物系男子たちは性病も妊娠もリスクのない二次元の『セーフセックス』を求めているのだろうか。性器、性行為の画像は、「見せてはいけない法律の国」日本でも「見せてもよい法律の国」から容赦なく流れ込んでる。

松埜はこれまで何度か、毎日、毎日、女性器を見ていて、

いい加減うんざりするだろう、と言われることがあった。この返事は難しい。飽きないと答えても、飽きたと答えても、次の追及は見えている。松埜は、同じものを見続けるのは歯科医でも耳鼻科医でも同じだ、と言った。うんざりするのとは多忙時の疲労感故である、とも。

だが、さりとて産婦人科医が女性器を見ても何も感じない、というのも当たらない。今ではまずそんなことはないが、若い頃は彼も少しば女性器が反応した。臨床実習や研修医時代は、白衣の下で盛り上がったズボンで冷やかされた同級生を何人も見た。今でもごくまれに、なんらか魅力を感じた女性の股間にその露わな秘部を見、また触れる刹那、喉が詰まって声帯が強張ることもある。だが今はその先ですぐプロとしてのスイッチが入る。重大な病、その危険な兆候を見逃せば、医師としての真価が問われ、ともすれば積み上げてきたものが無になる。その恐れと責任感が束の間の性的興奮は頭の隅に追いやり、必死に病と闘う職人になる。

むかし父の使いでしばしば刺身盛りを買いに行った寿司屋があった。学生客が多かったせいから至極良心的な価格の店で、新鮮な山盛りの刺身が、そこらの店の並寿司一人前ほどで買えた。「大将はいつでも生きの良い刺身食べられてイイね」というと、その親父が言ったものだ。

には穏やかな日々がある。まるで老齡の夫婦のように。「そんな子が増えているのかしら。隆志や浩紀が小学校の頃から、今のお子さんは女子の方が積極的だから注意して、担任の先生から言われてたものね」「例えばね・・・」

ワイドショー情報の受け売りなのか、少女漫画の過激化、少女売春や露骨なライブ配信など、清江が若年層の性事情に詳しいのは意外だった。「女も男みたいに『気持ちいい』が欲しいって言える世の中なのね・・・」「その方はいくつ?」

洋輔が「十八歳」というと、清江は宙を見つめ、手だけが食卓を拭いていた。生まれなかった長女はもし今、生きていたら、ちょうど同じ年ごろだった。

松埜は昔、父が初孫隆志の誕生の際にしみじみ言った言葉が忘れられない。

「男でよかった、男で。女はかわいそうだ。」

生物医学的に見て男は、女に比べて圧倒的に「ラクチン」な生き物だ、と松埜も思う。命がけの妊娠、出産はないし、そこに至る様々な肉体的苦痛や懊悩がない。男には複雑な内性器がない。二足で走るには邪魔だった男性器は殆ど外に押し出され、外傷リスクはあるものの、機能異常

「さかななんて まいんち 食べるような、そんなに旨いもんじゃないよ」

さかなは商売上、客に出すためのもの。ただひたすら、来る日も来る日も魚をさばっている、ということだ。だがそんな料理人だって、惚れ惚れする美味しそうな魚体に触れた時、なにかが脳髓に響き、まずは一切れ、特上部分を自分の口に運びたくなることだってあるに違いない。そんな誘惑に負けた医師がしばしば摘発されることになる。

◆妻 清江（四十八歳）性嫌悪症

夕食はいつも八時過ぎだ。

「今日さ、すごい子が来たよ。」洋輔は妻、清江に赤毛の患者の話をした。

普段、清江とはあまり診療上のご話さない。個人情報云々に触れないのはもちろんだが、どうしても性的なことに触れるからだ。妻には少なからず、性嫌悪症の気がある。もう二十年近く、セックスストレスだ。もともと神経質で性に関して淡白な質だったが、長男、次男を生んだ後、長女となるはずだった児の流産以来、忌避傾向は顕著となった。松埜の性的なアプローチはすべて、やんわり拒絶する日々、女性器を見ながら、妻に受け入れられない洋輔の性的興味は完全に現実から切り離された。それでも夫婦の間

のリスクが少なく、トラブル対応もかなり容易だ。他方、女は内臓である生殖器のために初潮以降、毎月出血し、腹痛、貧血、倦怠感などに悩まされ、閉経後はまた体内の激変に苦しむ。男はそれをどれほど理解しているだろうか。男の多くが高齡期に前立腺トラブルで悩まされるまで、生殖器で苦しむことはほぼない。性器をまさぐられて「性能」や「異常」を評価され、金属器具を挿入されて検査される産婦人科などはない。性病もその多くが生殖器官を体内に宿す女に対して、より過酷な災いをなす。およそすべての性病は男がその「神聖な場所」に持ち込むにも拘わらず、だ。米国では男子も子宮頸がんを招くウイルスの予防ワクチンを受けている。かつて女の世界で完結していた「お産」は、男が仕切るものになった。旧共産圏では多くの医師が女性だが、わが国ではまだまだ女性の婦人科医師が足りない。女性の苦勞と苦悩は所詮、男には「頭でしか」分らないのだが。

◆〇〇凌子（三十六歳）公務員・膣内違和感

この患者は先週、一風変わった訴えで来院した。曰く、「棒状のチョコを寝ながら食べていたら、銀紙が中に入っちゃって出てこなくなった」

医師の間で「患者は嘘をつく」は常識だ。銀紙は中に

「入った」のではなく、「入れられた」のだろう。だがこの場で「そこ」は問題ではなく、まずは不快の元凶を取り除かねばならない。

腫鏡で開いて内部を隅々まで目視したが見当たらず、今はほとんど禁じ手である「素手」での確認まで入念に行ったが、

「○○さん、なにも異物は見つかりませんでした」それゆえ不快感を生じうる性病の検査を行う、結果は来週後半に出る、と伝えて帰した。だが、患者は不服そうだった。

「目では分からない小さな傷があるかもしれません。今日塗ったのと同じお薬を出しますから、それで来週の来院まで様子を見てください。」

患者はスカートの裾を気にしながら頭をひねり、しかしなぜか満足そうに、少し上気した面持ちで帰っていった。

原川の話では、待合室で彼女はマル秘印が押された○○省のファイルをチェックしていたそうだ。

「偉い方なのかしら。いろいろストレス症状かも、ですね」

それが先週の金曜日だった。

今日の訴えもまた、同じだった。

「先生、まだ中に残ってる感じがするんです」と訴える顔

睨んだ。「不適切医療で訴える」とつぶやきながら。

松埜は最近読んだ記事を思い起こした。女性の性感を司るシステムは個人差が大きく、男よりかなり複雑で高度らしい。そもそも性器の形状からして個々人の顔と同様、極めて多様だ。「この世界」ではその昔、顔で思い出せない病歴、治療歴を、性器の形で正確に思い出す「名医」がいた、という都市伝説があるくらいだ。英国ではその形状の多様性を図解で中高生に示し、若年層で高まる性器成形手術への願望を論じているほどだ。女性に快感をもたらす神経ネットワークは全身に広がっており、その刺激・反応システムには脳の記憶回路が大きく関与しているという。『銀紙』の彼女は「ここ」でなにかを発見し、学習してしまつたのかもしれない。

◆宮田 友人（男、五十七才）

宮田から受信限定のメールが入ったのは、そんな不愉快な出来事があった日の夕刻だった。

「明後日は休診日？良い店見つけた。明日夜、呑まない？」

宮田はゴルフをやらない松埜にとって気おけない貴重な友人の一人である。

は少し上気し、うっすら汗をかいていた。内診台に上がると、呼吸が早く浅くなった。

「深く息を吸って、ゆっくり吐き出してください」

松埜はいつもの手順でクスコを挿入し、小さな傷も逃すまいと小型のコルポカメラを手にした。

「ピンクの銀紙だったんです。きつと見ても分からないです」

モニターを覗き込みながら患者が言う。「不快なのは・・・その・・・奥の方です」

松埜はクスコを抜き、素手で双合診のかたちをとった。患者の呼吸が早くなった。

「もつと奥の方です、もつと奥の・・」絞り出すような声が震え、「ウツ」で途切れた。

ピシャ！

松埜の顔面に体温の液体が掛かった。

「○○さん。当院ではこれ以上の診療はできません。」

来週もフォローしてほしい、という患者の執拗な要望をはっきり断った。すると目つきが変わり、『異常の原因も分からぬまま患者を放り出すのか』と食い下がってきた。

「残念ながら！」

彼女は診察室を出る刹那、振り返りながら半目で松埜を

産婦人科医は男友達が作りにくい。酔った男の話は半分が猥談だ。そこで産婦人科医はたとえ「挑発」されても話題に乗ってはならない。決して口にはいけないのが、女性器の俗称。うっかり口にしようなものなら陰に日向に非難を浴びる。思春期の悪ガキ共の常套句、万夫羨望の職業は、番台、三助、婦人科医。たちまち沈殿している男の羨望、女の嫌悪感とその巻き上げられ、行きつけの店でも「あの先生は」と後ろ指指されることになり、開業医なら病院の経営に影を落とす。産婦人科医は世間から「男」を捨てていることが求められるのだ。

そんな中で宮田は仕事柄、世界各地を飛び回り、遊びの限りを尽くした男だからこう言う。

「毎日毎日、女の股間を覗きこんで、ご苦労さんだなあ。他人が楽しんだ後始末もせにやならん・・」

高校の同窓だが、五十路路近くなって急速に親しくなった。松埜が妻との関係をふと漏らしたこともきっかけだったかもしれない。彼はしばしば、日本植物学の開祖、牧野富太郎の晩年の言葉を口にする。

『性の力の尽きたる人は 呼吸（いき）をしている死んだ人』

「『コンカフェ』って知ってるか？」歌舞伎町で落ち合っ

た宮田が得意そうに言う。コンセプト・カフェ。各店がそれぞれ別のテーマでスタッフもインテリアも統一したファッションで給仕する。メイドカフェもその一種だ。カフェとはいえ、夜はバータイム営業で酒を出している店もある、という。

店の中は思いのほか明るく、執事服のボーイと若いメイドたちが我々を席へ案内した。とりあえずの英国ビールを飲みながら大仰なメニュー表を読む。

「センセーッ！ 見つけ」

耳元の小声に振り向くと、真っ赤な髪のメイドが後ろから覗きこんでいた。患者、〇〇心愛だった。

「泡ものを入れてください！泡もの！特別価格にシマスから」

「泡もの？」

「ウィルキンじゃないですよ！シャンパン！！ドンペリ！クリコ！！」

メニューを見ると、泥酔してなきや思いとどまるレベルの価格が並ぶ。だが赤毛メイドは耳元で

「センセーはワタシのおマンコ見るのにお金とつたでしよ！？生配信なら何万も投げ銭しなきや見れないんだから！！だから大負けに負けていちマンえんプラス すりよ！！」

の笑顔になった。

いまこの「陰門」は、まさに「生命の門」となった。

「本当におめでとうございます」

松埜は心底から湧き上り来る喜びを伝えた。

◆患者 松埜洋輔五十七歳 前立腺癌

半年ほど前から前立腺がんのメーカーであるPSAがやや高めなことは気にはなっていた。だがその値は泌尿器科受診を促すスクリーニングレベルぎりぎりだ。まだ大丈夫と伸ばし伸ばしにしていたが、同期の医師から勧められ、大学の泌尿器科で触診を受けた。

ブリーフとズボンを下ろし、両膝を抱えた松埜の肛門に指を刺し入れた彼は

「触れるね。洋輔！もう立派なガンだよ。」と呟き「シンチと生検の予約入れておこうな」と言った。

後日、松埜は初めて婦人科内診時と同様の碎石位をとられ、肛門鏡で広げられた開口部から穿刺により二十ヶ以上の前立腺組織を採取された。その後数日は血尿の為、ナプキンのお世話になり、この一連の体験で一万分の一くらい、女性の辛さが分かったような気がした。

細胞診断の結果はグリソンスコア5+4。ほぼ最悪のレベルだった。なお悪いことに、シンチグラムで骨への転移

酔いが一挙に覚めた。

彼女は来月もピルを取りに来るだろう。次は三か月処方しよう、と松埜は思った。

◆患者 〇〇理恵 四十一歳 妊娠三か月

約一年前まで、都心の不妊治療で著名なクリニックに五年余通っていたが、昨年末、その終了を決心した。ところが今月、生理が遅れたのでよもやと思い、市販キットでチェックしたところ妊娠反応に陽性が出た。だが、先のクリニックとは気まずい、と当院に来院。再度、尿検査で陽性。内診とエコー検査をすることにした。

妊娠検査キットはかつて、婦人科学会が市販に反対していた。妊娠早期の避妊薬、アフターピル市販にも反対の立場だ。女性が自分の体、健康をチェックする術を抑圧しようとする医療は、果たして正しい医療と言えるのか。松埜には浅ましい利権の囲い込みのようにも思えた。

双合診で触れた子宮頸部は、かつてのゼミでの教えの通り、つきたての餅のように柔らかだった。

エコー検査のプロップを挿入し。モニター画像を見せた。「もう経膈エコーではとらえきれない大きさですね。」

内診台の上の妊婦は、ほんの少し恥じらいながらも満面

までも疑われる。前立腺癌は比較的五年および十年生存率が高い癌だが、転移がある場合はかなり期待値が低くなる。松埜は人生の終りが大きく近づいたことを悟った。

清江は気が小さい女だが、夫のガン宣告にも大きな動揺を見せることはなかった。この間、彼女なりに調べ、覚悟もしていたのだろうか。微笑みながら

「前立腺癌なら、それにあなたなら、きっと大丈夫。十年も二十年も・・・」

ここまで言つて、言葉は途切れた。

久しぶりに、息子たちがまだ帰らない時間帯の二人だけの夕食だった。

唇をぐつと結んで、サラダを盛り付ける妻を見つめながら

「なあ、今日は一緒に寝ないか」洋輔は控えめな提案をした。

「・・・いいわよ」清江は柔らかく向き直つて、そう応えた。

ほぼ二十年ぶりに二人寄り添うベッドの上で、洋輔は身体を開いた妻をそつと抱き寄せた。

「子供たちを、おれの子たちを、生んでくれて、本当に有

り難う」
夫は「生命の門」にそつと口づけをした。

著者後記

昨今、『健全で正しい』性教育の重要性が日本でも再認識されつつあるように思う。

LGBTやフェムテックへの取り組みに熱心なNHKは本年十月十七日に、英国のある番組を紹介した。ブリティッシュ・ベイクオフ (BBC放送) でも知られる英国々有放送・チャンネル4が二〇一六年から放送している、*Naked Attraction* (YouTube視聴可) である。これは全裸の男女がパートナーを選ぶ番組で、両性が何を求めるか教育的なナレーションが入る。成人対象ではあるが、完全無修正で放映されている。この番組は社会的な議論を巻き起こしたが、英国の情報通信庁 (Ofcom) は成人時間帯 (夜九時以降) の番組であり、身体的魅力の本質を探究する内容に正当性ありとして擁護した。同番組およびリメイク版は欧州九か国で放映され、類似番組も現れた。米国ではかなり議論が生じたが、類似番組はモザイク処理され以前より有料放送されていたようだ。ちなみにドイツ版はいかにものタイトル『アダムはイヴを探す』である。

性は命の出発点だ。科学的、社会的に適切な『性命教育』の確立と普及が、「異次元の少子化対策」には急務であらう。